清朝公羊學に就て二題

福家弘

常州學公羊說に限らず、公羊學が從來辿つて來た經緯には、種々輻湊した問題が內在してゐる。これから解說しようとする「春秋傳經說」、「素王素臣說」もこれである。常州學論語說のみでは、到底其の公羊說の全班を窺へないやうに、常州學公羊說だけでは、內容的に甚だ乏しい點もあるわけだ。此の闕を補ふには、常州學公羊說から前後に出發して、其の由來する所を探求すると共に、扨、これがどう後世の學に轉移して行つたかを追究せねばならない。

一、春秋傳經說

春秋傳經に關して、常州學派のうちに說をなす者を探索するに、劉逢祿が僅かに、左氏春秋考証に、

「夫子之經書於竹帛、微言大義不可以書見、則游夏之徒傳之、」

穀梁癈疾申何敍に、

「竊嘗以爲春秋微言大義、魯論諸子皆得聞之、而子游子思孟子著大綱、其不可顯言者、屬子夏口授之、

公羊氏五傳、始著竹帛者也、」

と言へるほかには、宋翔鳳が、論語說義序の文に、論語說を引釋し、

「子夏六十四人共撰仲尼微言、以當素王、」

と述べて、別に「孟子趙注補正」「孟子劉熙注」等の著述ある所から推して、大體、游夏から子思、孟子の學統が考へられてゐたらしいが、傳經を主題に論ずる所がない爲、其の輪廓を指摘するに止まる。

游夏の傳經說も遠く董仲舒、司馬遷に遡ることが出來る。繁露、俞序篇に、

「故子夏言春秋重人、諸譏皆本此、」

「衞子夏言國家者、不可不學春秋、」

とあり、子夏が春秋の傳經に關與したであらうことが窺はれる。史記、孔子世家を繙くと、

「至於爲春秋、筆則筆、削則削、子夏之徒不能贊一辭、」

との文があり、子游の二字は發見出來ない。閔因敍にも「使子夏等十四人求周史記、而得百二十國寶書、九月經立、」とのみ見えて、子游の名がない。ところが、春秋說題辭の文には、子游の名が表はれてきてゐる。

「孔子作春秋、一萬八千字、九月而書成、以授游夏、游夏之徒不能改一字、」

班固の漢書董仲舒傳贊にも、

「仲舒遭漢承秦滅學之後、六經離析、下帷發憤、潛心大業、令後學者有所統、壹爲羣儒首、然考其師友、淵源所漸、猶未及虖游夏、」

とあるが、游夏を以て公羊傳經の先師と見たからではあるまいか。

兎に角、游夏傳經の解說は、兩漢の昔に遡源し得るわけであるが、此處に、曾子を學統に入るるものと、曾子を排斥して、有若を學統に加へ、游夏傳經說を確立しようとする兩說が、降つて常州學、或は以後の公羊學に出現して來た。公羊傳を繙くと、屢々發見せられるのが「魯子曰」の文である。

「魯子曰、蓋不以寡犯衆也、」（僖公五年）

「魯子曰、是王也、不能乎母者、其諸此之謂與、」（僖公廿四年）

「魯子曰、溫近而踐土遠也、」（僖公廿八年）

常州學公羊說を奉じる凌曙は、其の著、公羊問答に、

「問莊公三年傳魯子曰、元郝氏經以魯子皆是曾子之訛、昭十九年傳引樂正子春爲說、子春是曾子弟子、則此爲曾子無疑也、此說可信否、曰、按元和姓纂、周公子伯禽至頃公三十四代九百餘年、爲楚所滅、子孫以國爲氏、漢魯賜碭人也、据此則孔氏之門徒受春秋者、尙無魯姓也、又按董仲舒繁露、引故曾子子石盛美齊侯安諸侯云云、則曾子亦深於春秋者、此處之爲曾子更無疑矣、又按王伯厚玉海、急就篇、

魯春秋注、已引公羊傳魯子、其誤已久」

と言ひ、元郝經が、曾子の弟子樂正子春の言を公羊傳に引ける所から、魯子を以て曾子の訛なりと說くを問へるに對し、淩曙は、元和姓纂、春秋繁露、王伯厚の編著に表はれたる所から、元郝經說に贊同してゐるが、勢、事は春秋傳經說に逢着して來る。陳立撰公羊義疏、一八、

「魯子者、舊疏云、傳所以記魯子者、欲言孔氏之門徒受春秋者、非唯子夏、故有他師矣、其隱十一年記子沈子者、欲明子夏所傳、非獨公羊氏矣、故輒記其人、以廣義也、」

此の義疏の說は、淩曙の說を重ねて贊同した者で、公羊義疏、五七に、「淩先生曙繁露注云」等の句を屢々看る所からしても、淩曙の說を多分に繼承したであらうことがうなづかれる。して看れば、曾子を春秋の傳經に加へる說は、常州學公羊說の一として支持せらるべき者と言へよう、しかも、子游に關しては贅言してゐないのは異色だ。

勿論、常州學の影響なしには考へられないのであるが、しかも淩曙、陳立らの曾子を以て學統に加へる說にも係らず、康有爲は單獨に、論語注、二十卷、其他の著述の中に放言してゐることは、有子を學統に加へて、曾子の學を熾に排斥することだ。學而篇の註文に、

「荀子十二子篇、以子思孟子案飾其言、以爲仲尼子游爲茲厚于世、則子思孟子爲子游後學、而子游嘗事有子、故有子實盡聞孔子之大道者、」

とあるのは、荀子非十二子篇の文旨から、子游、子思、孟軻の學統を案じ、更に有若を以て子游の先師とし、春秋傳經の系列に參加せしめる者である。又、別に、

「有子爲子游之師、當傳大同之道、」

と言ふ所から看れば、大同之道を傳へた、――明瞭に春秋の傳經を述べたものと考へられる。其の孔門中重きをなすこと、顏回に次ぐとて、

「有子孔子弟子、名若、少孔子四十三歲、孔子沒後、子夏、子游、子張之賢皆師之、蓋爲孔子傳道之大宗、子自顏子外得孔子之具體、最似孔子者也、」

の如き文旨もみえる。

扨、此の一方には、曾子の學を頗りに擯斥し、泰伯篇の註文に、「王肅不知考僞家語、以爲子思學于曾子、程朱誤信之、又附會爲子思孟子之正傳、以大學爲曾子之書、與中庸論語孟子名爲四子、于是中國之言孔學者、僅在守身、而孔子重仁之大道、一切指割棄、」

と言ふ、程朱の說を誹難すると共に、曾子の學を排斥する態度が窺へよう。學而篇の註文に、

「惜有子早沒、故所傳不及曾子之廣、後儒列十哲、擠有子于末、而以子思孟子出于曾子、實沿王肅家語之謬、不足據也、」

とあるが、之に據ると從來唱へられて來た曾子、子思、孟軻の學統說が崩されて了ふことになるわけ

だ。勿論、これは子思、孟子を子游の大同傳授の學統に參加せしめんとする心持から來てゐることではある。先進篇の註文に、

「曾子之質魯、故守約有餘、而擴充不足、雖至死、尙謹容貌、顏色詞氣之間宜其成就之、小於孔子大同之道、東周之爲期人之與、皆無所受也、」

論語註序に、

「曾子之學專主守約、觀其臨沒、鄭重言君子之道、而乃僅在顏色容貌辭氣之粗及啓手足之時、亦不過戰兢於守身免毀之戒、所輯曾子之言凡十八章、皆約身篤謹之言、與戴記曾子十篇相符合、宋葉水心以曾子未嘗聞孔子之大道、殆非過也、」

是等二文は、曾子の學風を曾子の人となりから誹毀したものであつて、曾子の學風から推して、大同の道が曾子に傳授されたとは考へられない、曾子の學風は、孔子の大同の道を與聞したとしては、餘りにもささやかである、と言ふ。一體、曾子の學が現在のやうに重きをなすのは、宋學の謬れる見解に因つたからであるとて、子張篇の註文に、

「朱子誤尊曾子過甚、」

と言つてゐる。子張篇の註文に、子張を推贊して、

「眞所謂德弘信篤者、迥非曾子子夏所能及、後人誤尊曾子、」

とて、曾子、子夏を其の引證に出してゐる、恐らく、康有有の意中は、子游の大同傳授を主張したからにこそあるのであらう。

併し乍ら、曾子の學の孔門に於ける價値意義を認識しなかつたわけではない、學而篇の註文にも、

「蓋孔門之後儒、雖分八、而本始實分二宗、譬之禪家、有子廣大如慧能、曾子謹嚴若神秀也、惜有子早沒、故所傳不及曾子之廣、」

と述べて、有子と曾子とを並稱し、又別に顏回を舍いては、七十子中、有子、曾子とさへ言つてゐる。斯くして、康有爲が言はんと欲する所は、學而篇註、

「子思孟子爲子游後學、而子游嘗事有子、」

泰伯篇註、

「子思之學出于子游、荀子之言最可信據、」

子張篇註、

「子游後學有子思孟子、爲孔道大宗、」

の意に在つた。

かうして、曾子・子夏・子思・孟軻の學統を案じた凌曙說と、曾子を舍いて、有子・子游・子思・孟軻を系列した康有爲說の二流が、常州學派及びそれ以後の公羊說に生來したわけである。徐ろに之を按ず

るに、要するに、子思・孟軻を公羊春秋の學統に入るゝことに反對はない、して看れば、思孟は孔學傳經の正宗であつて、春秋の傳經を此處に託さうとの深き見解が推測される。無論、孟子には、春秋學繼承の學的痕跡が充分窺はれるが、寧ろ、それより、此の孔學傳經の正宗に託するの意から來たつたのではあるまいか。凌曙が、曾子を學統に加へたのは四書說から、曾子・子思・孟軻の系列が考へられたことであらうし、康有爲が有子を以てしたのは、宋學を誹謗する、極端な漢學主義が、かうもあらしめたのであらう。併し乍ら、何故に突如有子が著想されたのか、全くの獨斷であつて、其の意を通じ得ない。一方、凌曙說も、郝經に遡つて證據するやうなものの、「魯子曰」は、莊公元年にのみ見えてゐるものでもなく、公羊傳十一卷のうちには點々散見するのである。逐一之を「曾子曰」の過誤と見做すことはどうだらうか。又、單に莊公元年の「魯子曰」のみを「曾子曰」と考へるならば、孔門七十子中、魯姓の者なしといふ自らの言葉が當らなくなつてしまふ。これは、陳立の言ふ「孔子之門徒受春秋者、非唯子夏、故有他師矣」の意に託すべきと思ふ。たゞ、魯子とは何人であらうか、此處に疑問が殘つて來るが、果してこれが孔門七十子の中に在る人やら、先秦、漢初の先師やら、これさへ分明しない。公羊傳中、「子沈子曰」「子女子曰」「子公羊子曰」等、其の例は尠くないが、孰れもこれは傳經につれての後代の揷記らしく、七十子の中に之を求めるといふことも眞に由なき事と言はねばならぬ。

斯くて、清朝後期に於ける公羊學の學統說は、子夏を舍いて、子游が論ぜらるるやうになり、禮記禮運の一篇を繞つて、子游の制作が華々しく主張せられ、春秋の學統を決定しようとされた。

禮運が子游の制作であるとの意見は、かなり古くから取沙汰されたらしく、朱子は胡明仲の言を引き、「禮運、是子游作」といひ、元陳澔も、「疑子游門人所記」といつてゐる。

當州學派に在つても、邵懿辰が、禮經通論に、「論聖門子游傳禮、」といふ小論文を掲げ、「聖門子夏傳詩、子游傳禮、此學者之恆言也、」とて、子游が孔門の禮を傳へた者であることを主張する。しかも、禮運が子游の制作に係るとの所說には、かなりの考證をわづらはしてゐる。

「禮運自稱言偃、則全篇皆子游所記孔子之言也、」

とて、言偃と自稱する以上、子游の門下の作であるとすることは當らない。若し、之を門下とするならば、必ずや言偃の名を呼稱することはあるまいと言ふ。又、檀弓下篇にある子游の禮、及び仲尼燕居、曲禮、玉藻等に、子游の禮をいふものが甚だ多い、これは、子游自らか、或は其の門人の記したが故ではないか、と疑ひ、禮の正傳が子游に在ることを敍して、禮運一篇が子游の作なるべきことを主張する。殊に其の末節に、

「曾子子思聖學之正傳、而子游則禮學之正傳也、」

「子夏兼通五經、而子游則禮學之專門也、荀卿書以禮法爲宗、大小戴多所采取、而其言曰、仲尼子游

爲茲厚於後世、以子游與仲尼竝稱、疑其隆禮之學自子游而來也、」

とて、荀子非十二子篇に、仲尼子游を以て並稱し、儒家に推す所からして、禮の正傳が子游にあつたと考證したことは、常州學以後の公羊說に頗る影響を與へたかの觀がある。

卽ち、廖平は「非十二子篇解」を試み、「仲尼子游並稱」を主張した。と言ふのは、非十二子篇に、仲尼子游を並稱する後文には、屢々仲尼子弓を並稱して、更に仲尼子游の並稱がない、これに對して邵懿辰は、

「然其後文又竝舉仲尼子弓、子弓不知誰氏、或謂傳易之馯臂、子弓則本作子弘、漢書在橋庇子庸之後、或謂冉雍字仲弓、則仲弓之學、他無表見、意者、檀弓、魯人、善於爲禮、或卽子游之門人、檀其氏、而子弓其字歟、是不可得而考、」

とて、疑を存するまゝにして居る。而るに廖平は、

「荀書屢以子弓與仲尼並列、上文子游、游字、疑弓之誤、抑或弓爲游字誤、」

と、尙ほ疑を多少おくかの如くであるが、禮運三篇合解には、禮運の一篇を以て、「子游大同學」と唱へてゐる處から看れば、又其の指向が考及されようし、非十二子篇解を試みた廖平の意圖が奈邊に在つたかも了解出來よう。

廖平の學を繼承した康有爲、梁啓超、共に此の荀子非十二子篇を以て、禮運は子游の作である、或

は、大同は子游の正傳である、との考據に之を用ゐてゐる。康有爲に禮運注に、

「言偃、孔子弟子、字子游、荀子非十二子篇稱、仲尼子游爲茲厚於世、以子游與仲尼並稱、且以子思孟子同出於子游、蓋子游爲傳大同之道者、故獨尊之、此蓋孔門之秘宗、今大同之道、幸得一傳、以見孔門之眞賴、是也、」

とて、子思・孟子が子游の學から派生したと說いてゐる。孟子微の序にも、

「游子受孔子大同之道、傳之子思、而孟子受業于子思之門、深得孔子春秋之學、而神明之、」

と言ふ。卽ち、凌曙の學統說に牴觸するわけだ。

是ら、廖平と康有爲の說を吟味するに、廖平の所說は、全くの獨斷で根據がない。子游制作の說は、容易に之を否定し得る、といふのは、論語は、有若、曾子の門人の撰と稱せられるが、孔子の言を、「孔子曰」とは述べずに、「子曰」と言つてある、禮運篇が子游もしくは、此の派の作であるならば、恐らく「子曰」といつたことであらう。

又、子思・孟軻を以て子游の學統に入るゝことはいかが？　もし、子游の學統に思孟が入るとならば、思孟、尠くとも孟子には、其の一篇中に於て子游を特稱すべきものがある筈であるに係らず、更に言ふ所なく、却つて曾子と子思に就て言ふことが多い。子游に就て言ふ所は、僅かに二個所に止まり、一は、公孫丑章句上に、「子夏子游子張、皆聖人之一體、」とあり、一は、「子夏子張子游」といふ。

いづれも子夏より下に排列されてゐる、しかも子游を褒める意は見えない。

且つ、非十二子篇を以て立證するが、其の根據たるや薄弱である。錯簡頗る多く、異本との校合に據つて、これが明らかにされる。王先謙の集解本に據ると、

「略法先王而不知其統、猶然而材劇志大、聞見雜博、案往舊造說、謂之五行、甚僻違而無類、幽隱而無說、閉約無解、案飾其辭、而祗敬之、曰、此眞先君子之言也、子思唱之、孟軻和之、世俗之溝猶瞀儒、嚾嚾然不知其所非也、遂受而傳之、以爲仲尼子游、茲厚於後世」とあるが、一本には、「猶然而」を「然猶而」と作り、又別本には、「猶然而不」となつて、「無說閉解」の四字が缺けてゐる。

斯る甚だしい錯簡から、郭嵩燾は、

「荀子屢言仲尼子弓、不及子游、本篇後云、子游氏之賤儒、與子張子夏同譏、則此子游必子弓之誤、」

と提言してゐる、邵懿辰の決論も又かうであつたとすれば、「仲尼子游並稱」の立論は、殆んど依據し得ざることになつてくるではなからうか。

卽ち、禮運篇の制作に子游を擧げることは、根據が甚だ物足らない。これは、禮運冒頭の大同說を言偃から孔子に結んで、從來說へられて來た、春秋の傳經說に、大同說を以て之を多彩にしようとした廖平、康有爲らの、公羊學的意圖にほかならない。だから之を以て、春秋の傳經が游夏の徒に在つたといふ、史記や說題辭の說を破ることは不可能なわけだ。

二、素王素臣說

宋翔鳳撰論語說義序に、冒頭、

「論語說曰、子夏六十四人共撰仲尼微言、以當素王、微言者性與天道之言也、此二十篇尋其條理、求其指趣、而太平之治素王之業備焉」

とある。素王論は、公羊學の投ずる興味ある問題だ。常州學論語說も必然的に孔子素王たりの論から出發してゐる。劉逢祿撰論語述何には、「素王」の言葉は發見出來ないが、顏淵を以て素臣としてゐる、衞靈公篇、「遠佞人」の條に、

「聖人所與共制作者、惟顏氏之子、博文約禮、用行舍藏、獨薦爲好學焉、天喪素臣、而二帝三王之治道、夫子之微言、或幾乎息矣、」

とある所から見れば、素王の意は充分窺ひ得よう。爲政篇、「五十而知天命」の條、

「謂受命制作、垂敎萬世、」

「溫故而知新」の條、

「六經皆述古昔、稱先王者也、知新謂通其大義、以斟酌後世之制作、」

八佾篇、「天將以夫子爲木鐸、」

「封人以夫子不有天下、知將受命、制作春秋、垂敎萬世也、」

子罕篇「鳳鳥不至、河不出圖、」

「天告夫子以將沒之徵、周室將亡、聖人不作、故曰、孰爲來哉、又曰、吾道窮矣、」

等の諸文は、孰れも孔子素王たりの論據から出た者でなくてはならない。

劉逢祿撰論語述何が、何休説をとほして孔子を研究する態度に比すれば、宋翔鳳の論語説義は、直接、孔子を研究するに在つた點からして、素王説を根據とする論旨が、説義十卷のうちに澎湃してゐる。

學而篇、

「當時君臣皆不知孔子、而天自知孔子、使受命當素王、」

爲政篇、

「春秋之作備闕疑闕殆之義、應天制作、號令百世、封人知之、故以何患於喪、告二三子、素王素臣昭然、」

等の諸文に對し、宋翔鳳が素王と稱する者には、必しも孔子に限られざるものがある。

爲政篇

「孔子作春秋、以當新王、而通三統、」

先進篇

「孔子成春秋、以當素王、」

等の文から看ると、春秋を以て素王に當つるの義が見えるし、

學而篇、

「禮運記、以禹湯文武成王周公爲六君子、以素王當之、」

雍也篇、

「桓文五伯之盛者、故舉之、其文史記之文也、孔子自謂竊取之、以爲素王也、」

等の文から推して、孔子以外にも素王と名稱されたことがわかる。勿論、戴望撰論語注は、劉宋二家の說を繼承して殆ど餘蘊がない。陳立撰公羊義疏、其の他、常州學今文公羊說も、此の素王の義を體しての立論であると思ふ。

孔子を以て素王に當つるの論は、既に董仲舒の春秋繁露、兪序篇に始まるらしい。

「孔子曰、吾因行事加吾王心焉、假其位號、以正人倫、因其成敗、以明順逆、」

素王の語こそ見えないが、素王の義を述べてゐると見做すべきだ。漢書、董仲舒對策の文には、

「孔子作春秋、先正王、而繫以萬事、見素王之義焉、」

とあり、董仲舒に素王の語が既にあつたと考へうるわけである。無論、後漢に至つては、今文たると、古文たるを問はず、公羊たると左氏たるとを論ぜず、「孔子自號素王、」の思想が汎く行はれたものらしい。賈逵春秋序に、

「孔子覽史記、就是非之說、立素王之法、」

「孔子旣西狩獲麟、自號素王、爲後世受命之君制明王之法、」

趙岐注孟子公孫丑篇、

「以爲孔子賢於堯舜、以孔子但爲聖、不王天下、而能制作素王之道、故美之、」

趙岐注孟子滕文公篇、

「孔子懼正通遂滅、故作春秋、因魯史記、設素王之法、謂天子之事也、」

盧欽公羊序、

「孔子自因魯史記、而修春秋、制素王之道、」

等の諸文が見え、緯書說にも尠くない。文選、孟堅の幽通賦注に引かれてある、演孔圖の文、

「麟出、周亡、故立春秋、制素王、授當興也、」

の如き是であり、說苑、貴德篇に見えたる、

「睹麟而泣哀、道不行、德澤不洽、於是退作春秋、明素王之道、以示後人、」

淮南子、主術篇、

「孔子之通、智過於萇弘、勇服於孟賁、足躡郊蒐、力招城闕、能亦多矣、然而勇力不聞、伎巧不知、專行孝道、以成素王、事亦鮮矣、」

の文は、公羊說以外にも亦素王の義を言ふものがあることを物語る。然るに、どうしたことか何休說には素王の言が發見出來ない。勿論、素王の意を暗示する點はある、或はやがて素王說に發展するであらうと看取されるやうな說はある、が、遂に素王の語は見當らない。

魏晉以降、此の說は益々流行したらしく、杜預の春秋左氏傳集解序には、某人の言、

「或曰、春秋之作、左傳及穀梁無明文、說者以爲、仲尼自衞反魯、脩春秋立素王、丘明爲素臣、」

を否定して、杜預は、

「子路欲使門人爲臣、孔子以爲欺天、而云仲尼素王丘明素臣、又非通論、」

と言つてゐる。王肅の孔子家語、本姓解にも、

「或者、天將欲與素王之乎、夫何其盛也、」

とある、丘明を以て素臣とする點からすれば、判然と左氏說にも素王に對する、或は素臣に對する見解があつたらしく、又、漸く此の時代に先立つて素臣の義が生じたのではあるまいか。孔穎達の左傳正義にも、

「麟是帝王之瑞、故有素王之說、言孔子素以身爲素王、故作春秋、立素王之法、邱明自以身爲素臣、故爲自王、作左氏之傳、」

とあり、左傳が、左丘明の作であることが、これ等によつて當然主張せられるわけだ。

此の左氏說に對して、公羊說に言ふ、素臣の義はこれと趣きを異にする。卽ち、左丘明に代ふるに顏淵を以てするに在る。常州學が墨守した素臣說も亦これに外ならない。論語述何、衞靈公篇、

「聖人所與共制作者、惟顏氏之子、博文約禮、用行舍藏、獨薦爲好學焉、天喪素臣、二帝三皇之治道、夫子之微言、或幾乎息矣、」

の文が是である。恐らくこれは、干寶の易雜卦注、

「弟子問政者數矣、而夫子不與言三代損益、以非其任也、回則備言、王者之佐、伊尹之人也、故夫子及之焉、」

何休注公羊、哀公十四年、

「天生顏淵爲夫子輔佐、死者、是天將亡夫子之證者也、」

等の意から出た者であらう。左氏說が、左丘明を素臣として主張した程には、古い文獻が發見しえない、併し此の左氏說に對抗する者には、顏淵の素臣說が指摘されるのである。ただ、北堂書鈔卷五二、論語讖卷三等に、

「子夏曰、仲尼爲素王、顏淵爲司徒、子路爲司空、」

の文を看る、顏淵を以て素臣となすの意であることが窺はれる。太平御覽卷二百七には、「子貢爲司空、」と作り、略々類型の文がある。

斯く、素王說を辿つて來ると、始めは「孔子自號素王」と言ふやうな說はなく、「以春秋當素王、」の義であつたらしい。素臣說の如きは更に降つて起つた說であるらしいが、果して何人の說き始めた說であるかは孰れも判然しない。皮錫瑞撰春秋通論の文に、

「公羊有春秋素王之義、董何皆明言之、而後世疑之者、因誤以素王屬孔子、」

とあり、孔子の素王たるの義を誤れりとして居る。して看れば、何休文謚例の文、

「新周故宋、以春秋當新王、此一科三旨也、」

禮記疏に引かれたる熊安生の言、

「孔子修春秋、爲素王法、以立言、」

等の言が、素王の眞義を穿つてゐることが了解されよう。臧庸撰拜經日記にも、此の義を論じて、

「釋文序錄云、公羊有王愆期注十二卷、字門子、河東人、晉散常侍辰陽伯、春秋制、文王指孔子者、門子用緯說、言春秋之法、以孔子爲文王、禮記正義、曲禮下曰、釣命決云、某爲制法之王、黑綠不代蒼黃、是孔子爲文王之事、又或稱素王、按緯說、以孔子爲文王、謂孔子作春秋制、法文王俟後世耳、非謂孔子謂文王也、王氏誤解、轉爲孔穎達輩取口實也、」

と言ふ、素王の義は、卽ち「孔子作春秋制、法文王俟後世耳、」に在るのであつて他に無い。

抑々、素王の言は、何處から來てゐるのか。莊子、天道篇の文、

「夫虛靜恬淡寂寞無爲者、萬物之本也、明此以南鄉堯之爲君也、明此以北面舜之爲臣也、以此處上帝王天子之德也、以此處下玄聖素王之道也、以此退居而閒游江海山林之士服、以此進爲而撫世、則功大名顯而天下一也、靜而聖、動而王、無爲也而尊、樸素而天下莫能與之爭美、」

に遡ることが出來るやうだ。「素空也、言無位而空王之、」「有其道爲天下所歸、而無其爵者、所謂素王自貴也、」等の注釋でもわかるやうに、老莊の「無爲而王」の義を思想するものである（大同の根義は、又在宥篇に見えてゐる、かうして看れば、莊子が公羊學の相當根本義に觸れるべき資料を提供するわけである、そこで廖平、以下の公羊說には莊子の思想が重視せられてきた、殊に康有爲には、莊子を以て春秋の學統に加へ、大同の道を傳へたとまでいふに至つてゐる。「論語註」○公冶長篇、「子贛曰、我不欲人之加諸我也、」の條、○「子贛蓋聞孔子天道之傳、又深得仁恕之旨、自顏子而外聞一知二、蓋傳孔子大同之道者、傳之田子方、再傳爲莊周、言在宥、天下大發自由之旨、蓋孔子極深之學說也、但以未至其時、故多微言不發、至莊周乃盡發之、」○子罕篇「顏淵喟然歎」の條、「五子皆善言德行者、然雖極力鋪寫、終不若顏子之形容矣、次則莊子、次則子思、次則子贛、次則宰我、」○述而篇に、「先後學荀子傳詩書禮、孟子傳春秋、莊子傳易、」）董仲舒對策に看るやうに、夙に董仲舒に素王の言あり、とするるならば、立元神篇、

「爲人君者、謹本詳始、敬小愼微、志如死灰、形如委衣、安精養神、寂寞無爲、」

保位權篇、

「爲人君者、居無爲之位、行不言之敎、」

等の春秋繁露の文から推して、尠からず、老莊の思想が浸潤してゐる、とすれば、素王の義も、もと、莊子天道篇の文から端緒となつたのではあるまいか。

此の素王說と平行するかのやうにして、王魯の說がある。これも、董仲舒の春秋繁露に見えたる、奉本篇、

「今春秋緣魯以言王義、殺隱桓以爲遠祖、宗定哀以爲考妣、至尊且高、至顯且明、」

王道篇

「諸疾來朝者得褒、邾婁儀父稱字、滕薛稱侯、荆得人、介葛盧得名、內出言如、諸侯來曰朝、大夫來曰聘、王道之意也、」

三代改制質文篇、

「故春秋應天、作新王之事、時正黑統、王魯尙黑、絀夏新周故宋、」

兪序篇、盟會要篇、

「因其國而容天下、」

等の諸文を以て其の始めとするらしい。史記、孔子世家にも、

「乃國史記作春秋、上至隱公、下訖哀公、十四年十二公、據魯親周、」

とある。而るに、王魯の說が、何休の剏解に出づる、と誹難する說が甚だしく多いのは、どうしたことだらう。陳立撰公羊義疏、四九、にも之を指摘してゐる。

「治公羊者、舊有新周故宋之說、新周出此傳、實非如注解、故宋傳絕無、又唯穀梁有之、然意尤不相涉、是以晉儒王祖游譏何氏黜周王魯、大體乘稼、志通公羊、而往往還爲公羊疾病者也、按新周故宋、見之董生繁露、史公孔子世家、必西漢經師相傳之義、孟子所謂、罪我者、其惟春秋、卽斥新周故宋等義、眞七十子微言大義也、非何氏剏解、魏晉俗儒不識經師大旨、」

勿論、是は、杜預の春秋左氏傳序の文、「言公羊者」の言、

「言公羊者亦云、黜周而王魯、危行言遜、以避當時之害、故微其文、隱其義、」

に對して、杜預が、

「所謂之王卽平王也、所用之歷郎周正也、所稱之公卽魯隱也、安在其黜周而王魯乎、」

と駁せるを、更に反駁した文でもある。此處に回顧して、何休學が、王魯三統等の說に據つて、何休學としての體系を形成してゐることは確かだ。此の點に關する限り、何休の剏說と思考せらるゝではあらうけれど、該思想個個の問題に就て、これが何休の剏解であるとして、難詰すべき理由は何等存しない。

實に王魯の說は、公羊學の條貫である。何休注、公羊傳、「隱公二年春、公會戎於潛、」の條

「春秋王魯、明當先自詳正、躬自厚、而薄責於人、」

邢昺疏「文公七年、三月、甲戌、取須朐、」の條、

「隱公之時、新王始起、當先自正、」

等、王魯の說は、累世公羊學の繼承する所となつた。常州學に在つても、無論、繼承せられ、華華しく展開せられた。劉逢祿撰穀梁申何、「僖公篇」にある、

「春秋非爲尊周而作、」

の言は、蓋し、大膽率直と言はざるを得ない。說苑、「君道篇」の言、「孔子曰、夏道不亡、商德不作。商德不亡、周德不作、周德不亡、春秋不作、春秋作、而後君子知周道亡也、」

に盛られたる思想より、層一層尖銳的ではないか。尊周の爲に作るに非ずとすれば、明らかに王魯の說を主張した者である。しかも、如何にもきつぱりと言つたといふ感にうたれる。

併し、ともすると、王魯の說と、「以春秋當新王」の說との間に、明瞭を欠かないでもない。一方では、春秋を新王と言ひ乍ら、他方では、魯を王とすると言ふのである。

其處には矛盾さへ感じられる。陳立撰公羊義疏、「隱公二年、春秋之始也」の條に、

「蓋隱桓以下爲春秋之隱桓、非魯國之隱桓、聖人以託之空言、不如見之行事、故假魯以張治本、非隱

眞爲受命王也、」

とあり、廖昺文撰春秋例表「朝例表第一」には、

「春秋王魯、而朝王如齊、著事天子方伯之義者、託正、非實王也、」

と、王魯の者が明瞭に示されてゐる。して看ると、「假魯」の義は、「春秋之隱桓、非魯國之隱桓、」の文に在るわけだ。「以春秋當新王」の說も、「王魯」の說も、畢竟は、同じ思想內容をもつものであつて、周の爲の「尊王」の義は全く無い。

最后に素王の說との關係であるが、これに關する適當な解說が發見されない。おもふに、魯は昭公出奔して、定公、元年に卽位を記載する能はず、公羊傳に、定公元年の條に、

「定哀多微辭、主人習其讀、而問其傳、則未知己之有罪焉爾、」

とあるを推してもわかる樣に、定公・哀公則ち、孔子の晩年には、魯の衰微は甚だしかつた、孔子が春秋經を制作して、春秋の制を確立するに至つた、それまでにも、當時の大人格として遇せられたことは推察しうる。論語、八佾篇の文、

「儀封人請見、曰、君子之至於斯也、吾未嘗不得見也、從者見之、出曰、二三子何患於喪乎、天下之無道也久矣、天將以夫子爲木鐸、」

子罕篇の文、

「子疾病、子路使門人爲臣、病間曰、久矣哉、由之行詐也、無臣、而爲有臣、吾誰欺、欺天乎、」

等から窺へば、孔子が當時凡ゆる方面からどんな態度をとられてゐたかが想像される。尠くとも一介の士ではなかつた、單なる世態の指導者でなかつたことは首肯し得る。無論、孔子自ら素王と號した、或は、孔子、春秋を制して、素王となす、といふ樣なことはうけがはれぬが、當時の人心の、孔子に對する態度の多くがかうなのではなかつたか。卽ち、「以春秋當素王」の義が會得せられる。恐らくこれは、孔子の歿後、春秋經に示されたる孔子の遺囑——春秋の制を以て孔子の精神の存する所と觀た、所謂、孟子、滕文公章句下、

「孔子曰、知我者、其惟春秋乎、罪我者、其惟春秋乎、」

の意から、「以仲尼當素王」の心持を、春秋經に移したのではあるまいか。後代、異說轉變して往く所を知らず、常州學公羊說に在つても、到底其の微言大義の奈邊に存したか、之を指摘することは不可能な狀態である。

公羊學の論說には、常識的に考へても實に獨斷と牽强附會が多い。併し、多いからといつて之を否定し去ることが果して妥當であらうか。公羊學は、新しい時代雰圍氣を把握して次から次へと新奇な展開を生んできた、時代思想につれて轉變してきた。所謂只管に「眞理」探求に沒頭する他の諸學と些か意義を異にする。一面歷史學であり、政治學であり、又思想學であると思ふ。